

序

吉田町誌下巻を上梓するに当りまして一言所感を申し述べます。

本誌は、昭和四十六年三月に発刊いたしました上巻について、芝正一氏を執筆者として委嘱し、刻苦数年ついに後世に伝える書として完成したものであります。

本誌は、明治初年より現在に至る間の諸史実をできる限り広汎に採録したものであり、その編纂方法についても執筆者の史観をもって叙せられたものではなく、できるかぎり現存する資料と史実を忠実に集大成し、かつ、親しみやすい町誌として叙述したものであります。

しかしながら資料の散逸は思ひのほか甚だしく、編纂過程における執筆者のご辛苦は、ことばに盡せぬものがありました。多数の方々のご盡力を得て補完することができました。ここに全町民の多年にわたる宿願でありました町誌を完結し刊行するに至りましたことは誠に慶賀に堪えない次第であります。

遠く過去の史実をたずね、歴史的背景を省察することにより今日の吉田を考え将来を志向する一助として本誌が活用されるならば望外のよろこびであります。

終りに臨みまして、本誌編纂のため数年に亘り心血を注いで力を盡していただきました芝正一氏はもとより町誌編纂委員会並びに貴重な資料の提供その他の面でご協力下さいました有志各位のご厚情に厚くお礼を申し上げます。

吉田町の今後の発展と繁栄を祈念し、発刊のことばといたします。

昭和五十一年三月一日

吉田町教育委員会教育長 児玉保美

目次

はしがき

第一章 吉田町の自然環境

位置	一
地勢	三
地質	七
気象	八
天災	三
生物	五

第三章 明治初期の吉田人にみる時代相

愛媛県	三
郡区町村編成法	三
戸長	七
武士階級の没落	三
授産と士族の転身	四
楽善会社	四

第二章 明治維新後の吉田

第一節 版籍奉還と吉田藩	一
第二節 廃藩置県と地方自治制度の変遷	六
吉田	六
宇和島県	七
神山県	六
大小区制	六

第三章 町村制実施後における吉田郷各町村のあゆみ

第一節 吉田町	五
第一代 岩村 高厚町長	五
第二代 横田 敏止町長	五
第三代 近田 永保町長	五
第四代 八島 伯豪町長	五
第五代 鳥羽 古兵衛町長	五
第六代 清家 吉次郎町長	六
第七代 朝岡 康三郎町長	六
第八代 程野 彌七郎町長	七

第九代 赤松 則義町長…………… 二五

第一〇代 河野 兵惠町長…………… 二六

第一代 豊田 房吉町長…………… 二六

第二代 溝端 茂雄町長…………… 二六

第三代 井上 豊太郎町長…………… 二六

第四代 鳥羽 泰藏町長…………… 二六

第五代 赤松 則義町長…………… 二六

第二節 立間 尻村…………… 二〇〇

第一代 真部 義正村長…………… 二〇〇

第二代 長谷川 行象村長…………… 二〇一

第三代 赤松 甲一郎村長…………… 二〇三

第四代 三瀬 六夫村長…………… 二〇五

第五代 中野 貞太郎村長…………… 二〇七

第六代 那須 武男村長…………… 二一一

第七代 赤松 則義村長…………… 二一四

第三節 喜佐方 村…………… 二一九

第一代 西谷 清温村長…………… 二一九

第二代 長谷川 行象村長…………… 二二三

第三代 宮田 喜寿村長…………… 二二三

第四代 内田 利喜造村長…………… 二二五

第五代 山下 重久村長…………… 二二六

第六代 清家 直男村長…………… 二二六

第七代 脇田 藤太郎村長…………… 二二九

第八代 清家彦右衛門村長…………… 二二三

第九代 木下 義嗣村長…………… 二二五

第一〇代 清家 彦三郎村長…………… 二二六

第一代 阿部 重剛村長…………… 二二九

第四節 立間 村…………… 二四二

第一代 飯野 忠常村長…………… 二四二

第二代 内田 利喜造村長…………… 二四四

第三代 高橋 鉄三郎村長…………… 二四七

第四代 宮川 利惠村長…………… 二四九

第五代 毛山 庄市村長…………… 二五一

第六代 加賀山 金吾村長…………… 二五五

第七代 毛山 庄市村長…………… 二五九

第八代 加賀山 金惠村長…………… 二六三

第九代 清家 房太郎村長…………… 二六五

第一〇代 新田 熊太郎村長…………… 二六六

第一代 宮川 利惠村長…………… 二七一

第二代 毛山 森太郎村長…………… 二七四

第三代 毛山 伊之吉村長…………… 二七九

第四代 新田 庄太郎村長…………… 二八三

第五代 水谷 正太郎村長…………… 二八五

第六代 児玉 信惠村長…………… 二八八

第五節 奥南 村…………… 二九三

第一代 那須 丹三村長…………… 二九三

第二代 小西 三郎村長…………… 二九四

第三代 清家 章道村長…………… 二九七

第四代 若藤 八太郎村長…………… 二九八

第五代 清家 宇太吉村長…………… 二九八

第六代 那須 林平村長…………… 三〇〇

第七代 古谷 福太郎村長…………… 三〇三

第八代 若藤 長松村長…………… 三〇五

第九代 増尾 勘太郎村長…………… 三〇七

第一〇代 水口 権六村長…………… 三〇〇

第一代 浜崎 亀造村長…………… 三〇三

第二代 原田 利喜造村長…………… 三〇四

第三代 田中 七藏村長…………… 三〇六

第四代 山下 政善村長…………… 三〇〇

第五代 若藤 富吉村長…………… 三〇三

第六節 玉津 村…………… 三三六

第一代 御手洗 道徳村長…………… 三三六

第二代 清家 頼穂村長…………… 三三六

第三代 高月市郎右衛門村長…………… 三三三

第四代 谷口 藤太郎村長…………… 三三三

第五代 浜田 八兵衛村長…………… 三三三

第六代 内田 利喜造村長…………… 三三六

第七代 浜田 八兵衛村長…………… 三三七

第八代 浜田 七十郎村長…………… 三三九

第九代 酒井 松太郎村長…………… 三三九

第一〇代 宮本 萬衛村長…………… 三四二

第一代 谷口 藤太郎村長…………… 三四二

第二代 高月市郎右衛門村長…………… 三四五

第三代 浜田 勘次郎村長…………… 三四七

第四代 清家 定穂村長…………… 三五一

第五代 宇都宮 常吉村長…………… 三五三

第六代 木村 茂村長…………… 三五五

第七代 高月 昭村長…………… 三五七

第八代 山本 利兵衛村長…………… 三五九

第七節 高光村内知永…………… 三六四

地形と風土……………三六五

産業事情……………三六七

教育事情……………三六九

変 災……………三七〇

民情と民俗……………三七二

第四章 合併後の吉田町と町政の推移……………三七四

第一節 六ヶ町村の合併と新吉田町の発足……………三七五

第二節 合併後における町政の推移と歴代町長……………三七七

第一、四代 山本 利兵衛町長……………三七七

第五代 加賀山 貢町長……………三七八

第六代 西山 茂町長……………三九〇

第三節 町議会の構成とその沿革……………三九二

第四節 町財政の推移と現況……………三九六

戦前における町財政の概況……………三九八

戦後における町財政の概況……………四〇〇

戦後における町財政の概況……………四〇五

第五節 町行政の発展と機構の変遷……………四〇五

第五章 産業と経済……………四〇七

第一節 農 業……………四〇七

農業生産……………四〇七

農業協同組合……………四〇七

農地改革……………四〇七

農業法人……………四〇七

農業基盤整備……………四〇七

第二節 柑 橘 産 業……………四〇九

吉田町における柑橘産業の沿革……………四〇九

立間蜜柑から宇和みかんへ(販売の沿革)……………四一三

宇和青果農業協同組合……………四一七

果樹試験場南子分場と村松春太郎……………四一七

第三節 養蚕と製糸……………四二〇

養 蚕……………四二二

製 糸……………四二五

第四節 林 業……………四二〇

第五節 畜 産 業……………四二二

養 豚……………四二五

養 鶏……………四二九

養 蜂……………四二九

第六節 水 産 業……………四二八

養殖漁業……………四三〇

漁業協同組合……………四〇六

漁 港……………四〇九

水産加工……………四一一

第七節 商 工 業……………四一三

商店街の今昔……………四一八

工業の沿革……………四二〇

吉田町商工会……………四二四

吉田町商工業協同組合……………四二六

第七章 教 育……………四七〇

第一節 学 校 教 育……………四七〇

私立村井幼稚園……………四七〇

吉田小学校……………四七三

吉田中学校……………四八三

私立山下実科高等女学校……………四八六

県立吉田高等学校……………四八九

吉田青年学校……………四九六

第二節 社 会 教 育……………四九六

第六章 交通と通信……………四九六

第一節 交 通……………四九六

道 路……………四九六

鉄 道……………四九四

バ ス……………四九五

海 運……………四九六

第二節 通 信……………四九六

郵 便……………四九六

電信と電話……………四九六

ラジオとテレビ……………四九七

私立村井幼稚園……………四七〇

吉田小学校……………四七三

吉田中学校……………四八三

私立山下実科高等女学校……………四八六

県立吉田高等学校……………四八九

吉田青年学校……………四九六

公民館……………四九六

図書館……………四九五

青年団……………四九八

婦人会……………五〇三

P T A……………五〇六

愛護班……………五〇九

吉田町体育協会……………五〇〇

吉田町文化協会……………五〇二

第三節 教育委員会と教育行政……………五三

吉田町教育委員会……………五三

吉田町における教育行政……………五三

第八章 治安……………五二

第一節 警察……………五二

明治の警察……………五二

大正から昭和にかけての警察……………五二

戦後の警察……………五二

第二節 消防……………五一

消防組の変遷……………五一

消防装備の変遷……………五一

第三節 交通災害対策……………五〇

第九章 民生……………五〇

第一節 社会福祉……………五〇

老人福祉……………五〇

児童福祉……………五〇

母子福祉……………五〇

その他の社会福祉……………五〇

国民健康保険と国民年金……………五〇

第二節 保健衛生……………五〇

伝染病……………五〇

結核とその予防対策……………五七

家族計画と母子衛生……………五一

成人病対策……………五二

環境衛生……………五二

公害と環境……………五九

第一〇章 町営事業……………五三

第一節 魚市場と青果市場……………五三

魚市場……………五三

青果市場……………五九

第二節 吉田病院……………五九

第三節 水道……………五九

南海地震と簡易水道……………六一〇

町村合併と上水道……………六一

大早魁と宇和川取水交渉……………六三

第十一章 文化活動とスポーツの変遷……………六三

第一節 文芸……………六三

美術……………六三

文学……………六三

芸能……………六三

第二節 趣味と娯楽……………六三

趣味……………六三

娯楽……………六〇

第三節 スポーツ……………六〇

武道……………六〇

相撲……………六七

庭球……………六八

陸上競技……………六九

野球その他……………六五〇

第二二章 観光と文化財……………六五

第一節 観光……………六五

南予の観光開発と吉田町……………六五

自然的観光資源……………六五七

文化的観光資源……………六六三

産業的観光資源……………六六六

吉田町観光開発の将来……………六九

第二節 文化財……………六〇

第十三章 兵事……………六六

第一節 兵制の変遷と西南戦争……………六六

第二節 事変と戦争……………六六

日清戦争……………六六

日露戦争……………六六

シベリヤ出兵……………六六五

第二次上海事変から日中戦争へ……………六六六

太平洋戦争……………六八八

第三節 戦没者名簿……………六九

西南戦争(西南の役)……………六九五

日清戦争……………六九五

台湾征討……………六九五

日露戦争……………六九六

シベリヤ出兵……………六九七

上海事変、太平洋戦争……………七〇〇

第十四章 拾遺……………七〇

第一節 西南戦争と飯淵貞幹	七六九	吉田町各機関人名簿	七八
維新後の社会情勢と貞幹の思想	七六九	あとがき	
飯淵貞幹の党とその周辺	七七〇		
国事犯事件の発覚と結末	七七〇		
第二節 吉田町労働小史	七五八		
吉田町における労働事情と住民思想の動向	七五七		
米騒動	七六一		
第三節 吉田町における過疎問題と人口の動態	七六八		
第四節 吉田町の宗教界	七五五		
仏教	七五五		
神道	七五九		
基督教	七六二		
その他	七六三		
第五節 吉田の三傑	七六三		
村井保固	七六四		
山下亀三郎	七六八		
清家吉次郎	七五二		
第六節 吉田の方言	七五四		
吉田町誌下巻年表	八〇一		
主要参考文献一覧表	八二六		

はしがき

私たちのふるさと、すなわち吉田町の歴史は、これをつぎの五期に大別して考察することができるように思われる。

第一期は、原始から、立間の地に農耕文化がもたらされた弥生後期にいたる、いわゆる未開の時代である。この時代は、これをとりあげて一期とするほどの内容、つまり、歴史をもつものではないが、町文化財専門委員会の研究対象として最近話題となっている立間弥生後期住居址の分布調査は、先史時代における原住民のありかたに一條の光を投ずるものとして期待がよせられている。

その第二期は、古代から中世にかけての、立間を中心とする立間郷の時代である。この時代は、立間の地が宇和文化の影響をうけはじめた古代から、立間郷の成立をみるまでの黎明期を経て、西園寺氏の支配下に中世を終わる千年の歴史をもつが、ことに、中世における郷土の盛衰を物語る遺跡・文献・伝承の類は数多く町内に散在し、今後、より深く解明されることが待たれている。

ついで、明暦三年（一六五七）伊達宗純によって創始された三万石吉田藩治世の時代である。これは、明治維新による版籍奉還（一八六九）までの、伊達氏九代二百十余年間にわたる。この時代は、見方をかえれば、伊達氏によって造成された旧吉田町の発祥と発展の歴史であり、三万石の陣屋町としての吉田が、歴史を明らかな行政体系をもつにいたった時代でもある。

明治の新政府による数次の行政改革は、当然地方町村にも幾多の混乱をおよぼしたが、このことは、旧吉田町および旧藩領であった吉田周辺の村・浦についても、同様であったということができよう。明治二十一年（一八八八）に公布された「市町村制」により、一応行政的に安定した各町村は、明治・大正・昭和の三代を通じて、それぞれ発展への歴史をたどるが、昭和三十年の六ヶ町村合併による大吉田町の誕生をみるま